

# 発達に違いのある子どもたち 生まれつきの「違い」が もたらす」と

自閉症スペクトラム障害（以下ASD）の脳を持つ、ある20代の女性Aさんはエピソードです。

Aさんは、小さい頃から身体の不調を訴えることが少なく、病院にかかることがあまりなかったので、Aさんの母親は、最初は頑丈な子どもなのだと思っていました。しかし成長して行く過程で、明らかに痛いであろう場面や、明らかに疲労している状態であっても、痛いとか、きついとか、表現することが少ないことに、疑問を感じるようになりました。中学、高校生の頃は、過労の挙句、突然朝から動けなくなることもありました。

AさんはADHD（注意欠陥多動性障害・不注意優勢型）も併せ持つことから、大人になつても身体のあちこちに、覚えのない青あざや小傷がよくあります。ある日、飲食店のアルバイトから帰ってきたAさんは、首のあたりに大きな絆創膏を貼っていました。母親が「それどうしたの？」と聞くと、「火傷してた。」と言いました。厨房で作業をしていたところ、揚げ物の油が飛び、首のあたりが真っ赤になつていることに周囲の人気が付き、絆創膏を貼ってくれたそうなのです。「痛くなかったの？」と聞くと、「うん、あん

まり。」というので、過去の出来事を色々と思い返しても、やはりAさんは「痛み」などの感じ方が普通とは違うのだと、Aさん自身も認識したのです。

## 必要なサポート

Aさんはある日、なんとなく身体の不調を感じ、母親に「なんだかお腹が痛いんだと思う。」と訴えました。「お腹がいつもより膨れているみたいだし。」とも。母親が見ても確かにいつもより膨らんでいる感じがし、また、便秘気味で市販の便秘薬を手放せないでいることも心配だったので、念のために病院に行くことにしました。ただ、一人で説明するのは難しいので、母親も一緒に行くことになりました。

Aさんは、病院の問診票は自分で書きましたが、主訴を理解してもらおうために母親が書き添えました。「Aさんは自閉症スペクトラム障害があり、身体の痛みや不調を普通の人より鈍く感じるようです。」と。先生も看護師さんも、不思議な顔はされました

が、問診で本人の訴えをよく聞いても結果は、腸にいたぶんガスが溜まつて

いたようで、通常だとこれは、お腹が張って痛いと思います、とAさんに丁寧なことばで説明がありました。母親が後方でやりとりを聞いていると、Aが、理由を聞いてびっくり、毎日5錠はAさんのこだわりでもあったようなのです。ASDであるAさんの陥りやすい行動について、改めてサポートが必要であることを感じました。

## 医療保険の加入

Aさんはこれまで、病院に行かなくてはならないような症状があつても、気付かず過ごしたのではないかと思うと怖くなりました。今後は、早期に気付く必要のある病気になる可能性も出てきます。

母親は、小さい頃に加入した、病気や怪我の保険の見直しをしたいと思いつつではないかと思います。

「違ひ」は本来誰にでも存在しますが、生きづらさを感じなければならぬほどの「違ひ」を、「個性」と捉えていほど、「違ひ」を、精神科で投薬を継続していることを理由に断られてしましました。しかし、これから先は女性特有の病気や癌などの心配をしなくてはなりません。思い切ってファイナンシャルプランナーに相談をし、現状で加入できるいくつかの保険に加入することができました。

その他に療育関係事業所で耳に入りました、「ぜんちのあんしん保険」にも加入了。ぜんち共済は、知的障がい、

発達障がい、ダウン症、てんかんのある人とその家族、親族のための総合保険で、病気やケガでの入院・通院に加え、パニックなどでトラブルが起きた時の権利擁護費用保険金や、加害者の権利擁護に詳しい弁護士費用の補償も付いています。別途がん保険も準備されており、ASDであるAさんはとつて、生活上切り離すことでのでとても安堵しました。

脳機能に生まれつき「違い」があると

いうことは、本人の努力によつて「普通の脳」の人の感じ方に近づくことはできません。同じにはなりません。私たちが発達障がいのお子さんや大人に関わるとき、お互いの「違ひ」を認識し、尊重しあうことから、平等な双方向のコミュニケーションがようやく成り立つのではないかと思います。

「違ひ」は本来誰にでも存在しますが、生きづらさを感じなければならぬほどの「違ひ」を、「個性」と捉えていほど、「違ひ」を、周囲の人の暖かな理解が必要不可欠です。そのような社会の実現のために、私どももその啓発に努めていきたいと思っています。

